畫牡丹處、極分明、子華北齊人、則知牡丹花亦已久矣、唐李濬摭異記云、大和開成中有程修己者、以善畫得進謁云云、會春暮內殿賞牡丹花、上頗好詩、因問修己曰、今京邑傳唱牡丹花詩、誰爲首修己對曰、臣嘗聞、公卿間多吟賞中書舍人李封正詩曰、天香夜染衣、國色朝酣酒、上聞之嗟賞移時、樂史楊太眞外傳云、先開元中、禁中重木芍藥、卽今牡丹也、注云、開元天寶花木記云、禁中呼木芍藥爲牡丹也、廣群芳譜引海記云、隋帝闢地二百里爲西苑、詔天下進花卉、易州進二十箱牡丹、圖經曰、百兩金葉似荔枝初生背面俱青、結花實後背紫面青、苗高二三尺、有幹如木、凌冬不凋、初秋開花青碧色、結實如豆大、生青熟赤、根入藥、採無時、用之搥去心、嚥津、河中出者、根赤色如蔓菁、莖細青色、四月開碎黃花、似星宿花、

〔書言字考節用集六生植〕牡丹（ハツカグサ）　廿日草（同和俗所用）　牡丹（ボタン）百兩金、富貴花、一捻紅、鹿韭並同、或云一名鼠姑、未詳、宜考本草又詩格註以其花富貴、故謂之花王、

牡丹（フカミグサ）

〔倭訓栞中編不二十二〕ふかみくさ　和名抄に牡丹をよめり、周茂叔の說に、牡丹花之富貴者也といへり、かみ反きなれば、富貴草の義なるべし、一說に牡丹の名によりてふかにくさといふ成べし、みとにと横音通せり、牡丹は赤き花を主とすといへり、肖柏の發句に、春さかぬ花やこゝろのふかみ草といへるより、牡丹花と呼なせりとぞ、牡丹は和歌には春の季とすれど、連歌には夏の景物とす、春の末より夏かけて咲ものなり、

〔野史二百六十一歌人〕肖柏、字夢庵、號牡丹花、太政大臣源具通之後也、國史實錄中略大永七年四月沒于和泉南郡、年八十五、實錄續奇人談、嘗咏牡丹歌曰、波留（ハル）差可（サカ）奴（ヌ）ハナノコヽロヤ（ヤフ）カミ（カミ）ク（クサ）以牡丹附首夏、蓋自肖柏始、○下略

〔藻鹽草八草〕牡丹

ふかみぐさ　異名也○中略廿日草　このはなのさく日數廿日をかぎりてさく也、仍號廿日草とや、藏玉に有、名とりぐさ　註○略照發草　これも異名と